

# プラス1



～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校  
地域支援センター通信  
No. 38 (H30. 4月号)

こんにちは！**東濃特別支援学校 地域支援センター**です。

新学期が始まりました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか？さて、今年度もセンター的機能充実事業の一環として「**通信プラス1**」を発行していきます。

本校の実践やセンター的機能充実事業で行う研修会、さまざまな特別支援教育に関する情報提供をはじめ、「地域支援センター」という名の通り、東濃西部地区のセンターとして地域を支援していけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



## 福祉サービス事業所による **合同説明会！！**



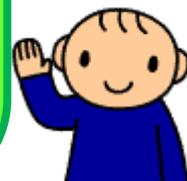
日 時：H30年5月2日（水） 9：30～12：00

場 所：東濃特別支援学校 体育館

内 容：各事業所様によるブース発表 →活動内容や作業製品の紹介

対象者：東濃西部地区（多治見・土岐・瑞浪地区）の保護者、学校関係者

現在、学校生活を送っている子どもたちの放課後や長期休暇に利用できる福祉サービス。そして学校卒業後に利用していくことになる福祉サービスの活動内容を1クール15～20分程度で発表してもらいます！子どもたちの生活を豊かにする大切な支援です。この合同説明会を通して、社会と保護者、学校が連携を深め、子どもたちへの支援の質を高めていこうと企画しました。ぜひ、情報収集にお集まりください！！



## H30年度 センター的機能研修(公開講座)のご案内

今年度、本校で行わせていただく研修会です。各研修内容、申し込み方については本校ホームページに掲載しますので、ご確認ください。たくさんのご参加お待ちしております。

※各研修には、定員を設けております。定員になり次第、締め切らせていただきます。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

第1回 7月27日(金)

湯澤 正通 先生(広島大学 大学院教育学研究科 心理学講座 教授)

先生はワーキングメモリーと発達障害の因果関係についての研究をされています。今回は、授業における支援方法についてお話いただきます。

第2回 7月31日(火)

伊田 勝法 先生(静岡大学 学術院教育学領域 准教授)

ご自身が不登校であった体験談をもとに、不登校の児童生徒と保護者への関わり方についてお話させていただきます。



## さあ、始めよう！充実の交流学習！！

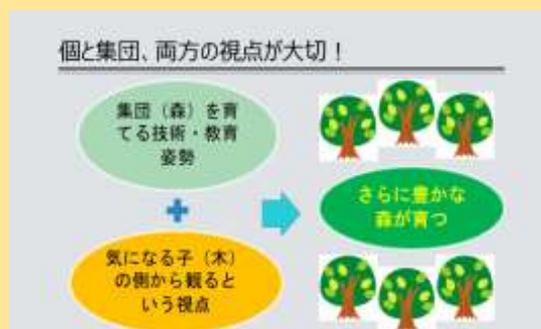
新年度、交流学習をスタートするにあたっての心構えや大事にしたいことをお話します。



左図の『木を育てる、森を育てる』を見てください。1本1本の木は子どもたち一人一人、集団は学級です。1本の木（個）をよく見る視点が特別支援教育の大きな視点です。1本ずつ、丁寧な育て方により、豊かな森（集団）が育ちます。通常学級では、集団（森）を育てる教育技術

に長けていますし、集団としての基盤ができています。そこに先ほどの個（木）をよくみる視点が加わるとき、さらに豊かな森が育つこととなります。まさしく、インクルーシブ教育、交流学習の目指すところですね。

校内では、特別支援学級と交流学級との学習が計画されていると思います。交流相手同士、お互いが成長し合うことが基本です。交流学級という集団活動の場では、**お互いを理解し合うこと、学級一人一人の居場所づくり**が大事です。**お互いを認め合う関係づくりを大切にした学級経営**を目指しましょう。



- 1 安心して活動に参加できるための環境整備に努めましょう。机やロッカーの準備はもちろんですが、所属意識や受入れ意識が自然に芽生える取組を考えましょう。
- 2 障がいについての正しい知識を学びましょう。交流する児童生徒の障がい、その特性について正しい知識をもって支援しましょう。参加できるだけでは意味がありません。仲間とのコミュニケーションが成立し、学習に参加できるための準備、まずは教師が障がいについて正しく理解することです。
- 3 適切な支援や協力の方法を教師間で相談しましょう。成功体験の積み重ねがお互いの成長につながります。特別支援学級の児童生徒の苦手さを教材の工夫や ICT の活用等で解消することも必要かもしれません。学習に参加し、「分かった」「できた」の場面が多くなることを目指しましょう。ここで重要なポイントは、教師間で練られた計画が、支援員とも共有できているかです。とかく分かり合っているようで、実は共有できていないことが

が多いのが現状です。複数の支援者で行う事前の打ち合わせと共に、指導後の情報交換も大切なことです。メモのやりとりくらいは日常的な行動として定着させましょう。

ここで活用したいのが「個別の教育支援計画」ならびに「個別の指導計画」です。打ち合わせに十分な時間がとれなくても、これらの資料から児童生徒の目標も含めて適切な支援を把握することができます。



きます。

居住地校交流も同様です。相談し合って「支え合う気持ち」を育む交流を目指しましょう。